

令和3年度第1回 千葉市史編さん会議議事録

- 1 日 時：令和4年3月10日（木） 午後1時30分～3時
- 2 場 所：千葉市立郷土博物館 講座室
- 3 出席者：（委員）
吉田会長、今井委員、小池委員、佐野委員
（千葉市史編集委員会）
池田委員長
（事務局）
佐々木生涯学習部長、佐久間文化財課長
天野郷土博物館長、芦田副館長、錦織主査、土屋主任主事

4 議 題

- (1) 令和3年度事業報告・令和4年度事業予定案について
- (2) その他

5 議題の概要

- (1) 令和3年度事業報告・令和4年度事業予定案について
令和3年度事業報告及び令和4年度事業予定案について説明した。史料調査・収集・整理事業、刊行事業、普及事業、千葉市歴史読本などについて議論が出された。
- (2) その他
特になし。

6 会議経過

午後1時30分、委員5人中4人着席。

司会（錦織主査）より、千葉市史編さん会議設置条例第5条第2項の規定により、会議が成立している旨が告げられ開会。その後、資料確認、佐々木生涯学習部長、新任委員の小池委員、吉田会長の挨拶に続き、設置条例第5条第1項の規定により、吉田会長が議長となって議事に入った。

議題1 令和3年度事業報告・令和4年度事業予定案について

令和3年度事業報告及び令和4年度事業予定案について、7つの項目に分けて、芦田副館長が説明。

<質疑応答>

吉田会長：議題1は多岐にわたるので、まずは史料調査・収集・整理事業から入りたい。

この村に関する古文書の収集経緯はどういったものか。

事務局（芦田）：現在の所蔵者が購入したものである。整理完了後に寄贈していただく予定である。

吉田会長：整理は先方で行っていただけるとのことか。この村の史料群は初めてか。

事務局（土屋）：近現代の区有文書以外、まとまった史料群はあまりなかった。

小池委員：個人の収集史料の概要にある、日立航空機関係の写真はどのようなものか。
事務局（土屋）：日立航空機の工場を視察している時の写真である。
吉田会長：収集史料というのは、基本的に購入されているということか。
事務局（土屋）：購入がほとんどである。
池田委員長：個人の収集史料にある書簡も購入されたものか。また、書簡はどなたかに宛てたものか、それとも受け取ったものか。
事務局（土屋）：書簡は購入されたもので、受け取ったものがほとんどである。
吉田会長：持参される史料群がいくつかあるということは、博物館に連絡すれば引き受けてくれるということが、基本的には周知されているということか。
事務局（土屋）：史料所蔵者に連絡しているだけでなく、博物館ホームページにも呼びかけのページは掲載している。それを見てメールや電話をしてくる方もいる。
事務局（天野）：市史研究講座の受講者にも、史料について相談がある場合、博物館へ連絡してほしい旨を伝えている。
今井委員：戦後から現代の史料について、どの辺から、何をテーマに押さえた方がいいかが見えると、モノによっては残しておいた方がいいという説明ができると思う。家の中を片付けている仲間もいるが、取っておいた方がいいと思うモノがあるような気がする。
また、高度経済成長期頃から、いろいろな場面の写真を撮っているが、撮影の時期や場所がわからなくなってきた。写真をプリントしたら忘れないうちに書いておかなければならないと自分でも思っている。写真は、どの方向から撮影したのかがわからないと、似たり寄ったりになってしまう。
モノによっては、個人情報も入っているので、取っておきたくないというイメージもあるようだ。うまく適切に説明するために、史料としての基準があるといいと思う。
事務局（天野）：確かに具体的な基準を示していく必要がある。写真の所蔵者を訪問してみると、プリント写真はなく、ボロボロになったネガしかなかったことがあった。また、作業風景の写真があるか聴いてみると、昔は取ってあったというような返事をいただくこともあった。
今井委員：旧生浜町役場庁舎では、民具が収集されているので、その民具が使われていた写真があるといいのだが、それが無いので、誰かに絵を描いてもらっている。しかし、実際に民具を使用している場面を見た人でないと、絵を描くのはなかなか難しい。
事務局（天野館長）：旧生浜町役場庁舎で海苔作業の貴重な映像を見せていただき、あのような映像がよく取ってあったなど感激した。
今井委員：雑貨屋についても、いろいろなものを店先に出している写真などが意外と無い。雑貨屋の人は、毎日見ている光景なので珍しいと思っていないけれども、その風景を撮っているのかもしれない通行人がどこへ行ってしまったのかわからないので、なかなか写真を探すのが難しい。撮影の時期・場所・方向がわかれば、被撮影者に写真を送ってあげた方がいいのではないかと思ったりもする。
そういうことも含め、どういうモノを残しておいた方が将来的に史料になるのか伝えてあげれば、人々は意識するのではないかと思う。意識しないと捨ててしまう。
吉田会長：明治時代では、お雇い外国人や海外から来た人が、日本の農村風景とか、当時の東京の街を撮っているの、それが非常に貴重な史料となっている。写真のことも含め、収集の基準を整理した方がいいのではないかと思う。
今井委員：近現代史料編を編集している最中なので、基準を考えるのにいい時期なのではないかと思う。

吉田会長：オーラルヒストリーも、音声史料の収集という点では、大事ではないかと思う。
事務局（天野）：近現代は文書だけでなく、写真も残っているのだから、収集の基準は考えていく必要がある。

吉田会長：ただし、収集のガイドラインのようなものを示すと、基準に満たないモノは捨てていいのかということにもなりかねない。

次に刊行事業はどうか。『千葉いまむかし』に関する市民の感想などはあるのか。

事務局（芦田）：感想のようなものを収集しているわけではないが、最新号の発行時期についての問い合わせが毎年くる。内容的には専門的な論文等が載ることが多いが、市域の歴史を知る上で重要なツールの一つと思っている方もいるのではないかと思う。

吉田会長：毎号を購入されている方が何人もいるということか。

事務局（天野）：間違いなくいる。全ての号数を持っている方もいるし、原稿を投稿したい方もいる。

吉田会長：創刊号のときに、冊子のタイトルをどうするのかといった時のことをよく覚えているが、来年度の発行が36号になるということで感慨深い気持ちである。さらに、「ちば市史編さん便り」についてはどうか。近現代史料編の刊行に合わせ、最近では近現代の記事が多いので、もう少し時代のバラエティを持たせた方がいいと思う。

続いて普及事業はどうか。市史研究講座の講師については、千葉市歴史読本の執筆者にお願いし、自分が書いた部分を少し広げて講演していただいてはどうか。

事務局（天野）：参考にさせていただきたい。

吉田会長：千葉市歴史読本や講座アンケート集計結果を見て思うのだが、千葉市民の中世に対する関心は、千葉氏や戦国期の武士にあるようだ。他の時代の多くは、民衆や集落のことを取り上げている。大河ドラマも含め、国民の歴史意識のなかで、中世というのやはり非常に特異な扱い方をされていると感じる。確かに中世は、普通の民衆の暮らしを示すような史料が豊かではないが皆無ではないし、そういう民衆がたくさん存在して武士の社会が成り立っていた。千葉市域でもそういう内容を少しでもカバーするような努力が大事ではないかと思う。

事務局（天野）：『千葉市史 史料編1 原始古代中世』は、刊行してから時間がかなり経過している。昔になればなるほど、どうしても地域の歴史が、地域の武士団の勃興・盛衰史で終わってしまっている。もう一度改めて、中世の史料を基に幅広く、編み直したり調べたりしていくことが極めて大事になってくるのではと思う。

吉田会長：高校の日本史教科書の編集に携わってきたが、そこにも同じ問題があり、縄文時代・弥生時代は民衆しか出てこないが、中世は荘園があるものの、武士が中心になってしまっている。近世になると村落が出てくるが、近代はどちらかと言えば政治史が中心になっている。だから、高校生が日本史を学ぶときは、ある意味ジグザグな感じになる。社会の変化をずっとみていくような形には作られていない。

次に、古文書講座についてはどうか。古文書講座の参加者はリピーターが多いのか。

事務局（土屋）：中級古文書講座は、どちらかと言えばリピーターが多い。初級古文書講座は初心者の方が多い。

吉田会長：初級の次に、今度は中級を受講してみようとする方がいるのか。

事務局（土屋）：初級を受講者の中に、中級にチャレンジしてみようと考えている方が何人かいる。

吉田会長：3か月程度で6回開催することは、ある程度集中してはいるけれども、それで古文書が読めるようにはならないと思う。

事務局（土屋）：この短期間だと、すぐには古文書が読めるようにはならないと思う。

吉田会長：古文書講座は、抜本的に見直して強化すべきではないかと思う。講座を受講し続ければ古文書が読めるようになる、という程度のカリキュラム等を考えて、大学とも連携してみてはどうか。また、初級古文書講座の応募者が約80名もいるというのは、やはりすごいことだと思う。応募者は年配の方が多いのか。

事務局（天野館長）：基本的に年配の方が多い。

吉田会長：古文書講座で近代の史料をテキストにすることは可能なのか。

池田委員長：可能だとは思いますが、古文書講座の受講者からすれば、近代の史料を古文書と思わないかもしれない。

吉田会長：書状などは江戸時代よりも明治時代の方が難しいと思う。

続いて研究事業についてはどうか。今後の展望というか、来年度の計画はあるのか。

事務局（土屋）：「江戸と千葉」研究会については、第2回目を1月末頃に予定していたが、諸事情により中止となってしまったので、来年度に改めて開催することを検討している。

吉田会長：次に市史協力員（ボランティア）の活動についてはどうか。ボランティアは、ずっと継続されている方なのか。

事務局（土屋）：ほぼそうである。

吉田会長：続いて史料編近現代について、池田委員長より何かあればお願いしたい。

池田委員長：現在は、各委員が担当の章節に関する掲載候補史料の選定を進めているところである。構成案は、決定したものではなく、掲載候補史料を絞り込んだ段階で、章節のタイトル等を多少変更する場合が考えられる。

吉田会長：刊行まであと2年ということか。

事務局（土屋）：令和4年度・5年度でまる2年である。

吉田会長：では最後に千葉市歴史読本について、お手元に配付されたものを参照していただければと思うが、何かあるか。

事務局（天野）：皆様には本当に短期間でご執筆くださり、感謝申し上げたい。1つの冊子を刊行するまでに相当に苦労したところがあり、反省点も多い。

池田委員長：千葉市の歴史をわかりやすく解説している冊子が刊行されたことを、もっと市民に知ってもらうような広報を検討してほしい。

事務局（天野）：市政記者への資料配布、ちば市政だより、当館ホームページなど、いろいろな場面で広報していきたいと思っている。

佐野委員：テーマ項目ではしっかり解説して、コラムで執筆者の思いが少し入っているなど、客観的な部分と主観的な部分がうまく織り交ぜられ、本にリズムが出ていると思う。

事務局（天野）：評価してくださり、大変有り難い。

佐野委員：これだけまとめるのは、本当に大変だと思う。多くの専門家が執筆されている中で、統一感を出すのは本当に難しい。苦労が垣間見えた。

吉田会長：図版も結構多いので、レイアウトも大変だったと思う。

佐野委員：例えば、ある図版を見ると、江戸時代の工事現場の労働者は、入れ墨を入れていたことがわかる。こういったことを図版で見ると楽しいと思う。

吉田会長：この図版に関しては、ある研究者にとってかなり思い入れが強いようである。

佐野委員：中世の庶民の暮らしについては、図版が1枚あるだけで、現代の生活との共通点や相違点がリアルにわかる。そういった史料も大切であると感じた。

事務局（天野）：中世の場合、基本的に史料が少ないので、どうしても武将の書状から読み解くような内容が多くなってしまふ。ただし、今回の歴史読本では、紙背文書などから、

当時の庶民の様子を描くことができるテーマもある。

吉田会長：今回の歴史読本は、今までの千葉市域の歴史研究の到達点であり、研究成果を反映している。今後は、市民などから、いろいろな感想や批判をいただくことができる機会があるといいと思う。

事務局（天野）：取り上げてほしいテーマ、または足りない点があれば、増補版の作成など、次につながられるようにしていければと思う。いろいろな意見をお寄せいただくために、多くの市民に手に取っていただければと考えている。

佐野委員：古文書整理ボランティアと、中級古文書講座の受講者との間で、レベルの差は大きいのか。中級の受講者が、史料を読み解く側になりたいと思ったとき、すぐになることができるものなのか。ボランティアの人数が増えれば増えるほど効率も良くなるし、整理作業も進んでいくと思う。

せっかく学んだことを、実際の史料整理の場で活かすことができる仕組みができると、モチベーションアップにつながると思う。自分の趣味だけではなく、それが社会の役に立つ、または地域の役に立つような道が開けてくると、参加の意識がもっと高くなっていくような気がする。

事務局（天野）：参加することで将来の成果につながる道筋ができるようになれば、理想的である。

事務局（土屋）：ボランティアは、午前中に史料整理を行い、午後になると御用留の複製を利用して自主的な勉強会をしている。

吉田会長：それはまったく自主的に行っているのか。指導するということはあるのか。

事務局（土屋）：完全に自主的な勉強会である。

事務局（天野）：とても熱心に活動しているので、先につながるようにしてあげると、モチベーションの向上にもなっていくだろう。

事務局（佐々木部長）：学びを個人のものだけに終わらせるのではなく、地域に還元していくことができれば、地域が盛り上がることになり、地域課題の解決にもつながっていく。公民館でも地域課題の解決が話題になっている。そういった仕組みづくりを考えていくことが大事であり、行政側もそういった仕組みが求められている気がする。

吉田会長：古文書の整理を行うだけでなく、もう少し高度になると例えば、1年間かけて帳簿のような史料を翻刻して、市史の職員の協力を得ながら、史料集として1冊に仕上げるといったことが、かなり大きなモチベーションになるのではないと思う。

ただ単に史料を翻刻するだけでなく、史料に何が書いてあるのか、それが自分の先祖だったり、自分が暮らしている村や近くの村だったりすると、またその内容を調べようというようになってくる。

せっかく古文書講座を実施しているので、そういった道筋を体系化してやるべきではないかと思う。予算の問題などで難しいとは思いますが、現状でもできることはある。

佐野委員：そのうちA Iで古文書が読めるようになるかもしれない。データベースを積み重ね、次々にくずし字をあてはめていくと、どんな難しい古文書でもある程度の確率で現代語に訳すことができちゃう。そういった時代が到来するのが遠くはないと思う。

ただし、そのノウハウは、その事業に関わる人たちが蓄積していかないといけない。

A Iは自分から学習するというよりも、どんどんインプットしていかないと学習していかないの、現状の役割とか、現時点で行っている事業は、すごく大切なことだと思う。

吉田会長：A Iには古文書の解読は無理だと思う。一定のくずし字で書かれているものであれば対応できるかもしれないが、古文書のくずし字はもっと多用であるし、近世後期

になってくると、いろいろな癖が出てくる。そういうものにほぼ対応できるようなAIが登場するよりも、人間が古文書を読むトレーニングをした方が面白い。

佐野委員：そうすると、なおさら現在の活動が重要になってくる。

吉田会長：これまでの内容も含めて何かあるか。

池田委員長：中長期的な展望に関して、新しい通史編の編さんも検討しているのは、あくまでも郷土博物館の方であって、千葉市全体で議論されているのか。

事務局（芦田）：まだ近現代史料編の編集途中であるため、新しい通史編を含めて今後どういう形で市史編さん事業を展開していくのかということについて、市内部での方向性はこれから議論していく。現時点では、市史編さん事業継続の必要性について、博物館で認識は共有されている。

事務局（天野）：この会議で現状の課題を出したうえで、市史編さん事業の必要性について答申などを出していただき、それを市内部で具現化していく形になると考えている。

吉田会長：答申の前に諮問を出していただく必要がある。あるいは、市史編さん会議から市へ提案するといった形はあり得る。

小池委員：「記録する」ということについて、我々も現在、コロナの時代という歴史的な時代を生きているという感覚を持っている。そうすると、今の時代に何を記録するべきなのかを考える。我々は常に今の時点で過去を見ているので、未来の視点で今残す記録というのは何なのか、記録者の視点が必要なのではないかと思っている。

例えば、日本では第二次世界大戦中にあれだけ生産された零戦21型の塗装が、わずか40年たった1980年代には不明瞭になり、怪しげな説が有力となってしまったということがある。一方、イギリスの雑誌を見ると、当時の人がスケッチで塗装を実に細かくに記録しており、それが何十年経過しても残っている。

そうするとやはり、記録者というのが非常に大事で、記録者の視点から、これだけは残しておこうという目で見しておく必要があると感じる。

今井委員：成田空港建設反対運動が起こった当時、千葉駅前で毎日のようにビラが配られていたが、図書館がそのビラを集めて、何のビラを取っておくのか議論していた光景を見たことがある。その時も、何を今後のために記録したり、史料を集めたりしたらいいかということちょっと考えたことがある。「いま」の将来がどうなっていくのか予測はできないが、「何が必要か」ということは考えてしまう。

吉田会長：こうした重要性について、みんなが意識を共有するということも大事だろう。

千葉市の場合、行政の立場からいろいろな場面で市の出来事を記録し続けている。人々が置かれた現状を含め、写真なども膨大に撮影しているだろう。一方で市民も、意識的にいろいろな場面を継続的に記録することが問われているのではないと思う。

小池委員：新聞社などは、記録を意識して新聞記事を作成しているのだと思う。博物館の場合は、こういう史料が昔あったら良かったと思えるようなモノを、逆に今残すという作業が必要であると思う。

吉田会長：確かに何もしないと、あと何十年か経過したら、今を記録しているのは新聞社の記事だけみたいなことになりかねない。

事務局（天野）：学校現場でも、貴重な史料になりそうな昔の教材など、古いモノが捨てられてしまう事例があるので、何かしらの基準が必要である。ただし、博物館の収蔵庫もほぼ満杯の状況なので、どこに保管しておいた方がよいのか考えなければならない。

吉田会長：ある市界隈の動きをみていると、市民の自発的なグループが「捨てないで」という運動を展開している。地元の新聞社がリーダーとなり、大きな倉庫を借りて、あち

こちらから寄せられたガラクタ・古い本・古文書などを定期的に引き受けている。古文書については、地元の史料保存機関に照会する取り組みを行っている。そこに行政は全く絡んでいない。古いモノをどう処理したらいいのかわからない場合に連絡すると、そのグループが引き受けてくれる。ただし、そのグループには専門家がないので、引き受けた後の保管方法までは見えていない。

事務局（天野）：昨今の「断捨離」の風潮には良し悪しがあると思う。

吉田会長：重い課題が出てきているが、議題2に移る。

議題2 その他

<質疑応答>

吉田会長：議題2はその他とあるが、何かあるか。特に何もなければ、以上をもって、議事を終了する。今回の会議で出された課題は、何かの形にしていきたいと思う。

司会（錦織主査）の進行により、令和3年度第1回千葉市史編さん会議を終了した。

問い合わせ先 千葉市立郷土博物館市史編さん担当
TEL 043-222-8231